令和７年度　協働のまちづくり活動支援事業公開選考会

＜事業内容・質疑応答＞

１．特定非営利活動法人恩おくり

◆事業内容

　子ども食堂は子どもの居場所の１つとして期待されるが、居場所として機能するには１小学校区に１つ以上の小さな子ども食堂があり、子どもが歩いて行ける距離に複数の子ども食堂があることが望ましい。しかし実態は異なるため、子ども食堂を増やす、継続するための運営者を増やす第一歩として「広報＆開拓大作戦」と題した事業を提案する。

【団体の紹介】

　当法人は、2022 年12 月から2024 年2 月までは「おんくりの輪」という任意団体として活動を開始し、2024 年2月にNPO 法人化した。

＜活動内容＞

・地域の居場所づくり
・多世代向けイベントの開催
・商店街の活性化
・子ども食堂・地域食堂の運営
・フードバンク関連事業
・フードサポートネットワークの構築
・家庭菜園援助および家庭菜園0円マーケット

目指すのは、
住民同士の支え合いを生み出し、
安心して住み続けられるまちづくり

＜実績～協働のまちづくり活動支援事業～＞

・令和5年度 「拡がれ！おんくりフードドライブの輪」

　食品募集（フードドライブ）と食品配布（フードパントリー）を法人拠点で実施。広報チラシを作成し、江別市内の新聞折込により周知したところ、多くの食品寄贈や利用者の来訪があり、地域のニーズを確認することができた。

・令和6 年度 「食の支援拠点を広めよう！出張・協働フードパントリー実践＆広報大作戦」

　市内複数の子ども食堂拠点に出張し、食品配布を行った。配布と同時に、子ども食堂などの食支援情報を掲載したチラシを、前年度に周知が行き届いていた西大麻エリアを除く市内全域に配布した。

令和５年度・令和６年度の活動の中で、フードバンク活動の開始（令和5 年12 月）、イオン江別店・ホクレンショップ・アークス大麻店でのフードドライブの実施、フードサポートネットワークえべつの発足などが進んだ。食品は希望する子ども食堂団体などに月1回程度提供している。

【課題・ニーズ】
・食品無料提供を必要とする人が市内広範囲に存在している。
・食品配布だけでなく、交流の場が必要である。
・子ども食堂の正しい情報が広く周知されていない。
・子ども食堂の拠点が野幌エリアには存在しない。
・大型化した子ども食堂では個別対応が困難であり、小規模な子ども食堂の新設が必要。
・子ども食堂のボランティア希望者が多い一方、拠点との接点が不足している。

【事業概要】
①チラシ制作と情報発信
・市内で定期開催されている子ども食堂の情報をエリア別に掲載。
・市内のフードドライブ実施場所の情報を掲載。
・新規立ち上げの相談を受け付ける旨を明記し、子ども食堂に関する各種問い合わせを促す。
②子ども食堂（居場所づくり）学習会の開催
・立ち上げ相談を受けたエリアにて、学習会を開催。
・必要に応じて広報の協力（SNS による情報発信）を行う。
・立ち上げ初期には、当法人のメンバーが初回から2 回目程度まで運営補助として参加する体制を整える。

【期待する効果】
・子ども食堂に対する理解が広がり、協力者が増える。
・子ども食堂の数が増えることで、子どもだけでなく高齢者など多世代の居場所が増える。
・地域の多世代交流の機会が増え、地域の見守り体制が強化される。

【収支予算】
・収入
36,906 円を計上。内訳は、自己資金とする。
・支出
学習会や立ち上げ支援に伴うメンバー交通費、チラシ・ポスター印刷費、学習会の会場費等。

【最後に】
今後は、野幌エリアなど未設置エリアを含めた子ども食堂の開設支援や、フードサポートネットワークの体制強化、参加しやすい仕組みづくり、フードバンク活動の基盤整備を進める。また、2027 年度までに、市内17 小学校区すべてに子ども食堂を展開し、企業や関係機関とも連携して「オール江別」の支え合いネットワークを形成することを目指す。

◆　質疑応答
【選考委員Ａ】
市内の子ども食堂の実態について、現在の件数を教えてほしい。また、学習会の開催回数について、目標はあるか。
【発表者】
現在、定期開催している子ども食堂は6 か所、その他不定期開催や地域食堂の類似活動を含めるとさらに数か所存在する。野幌エリアに関しては未設置であるため、2 か所程度の新設を目指し

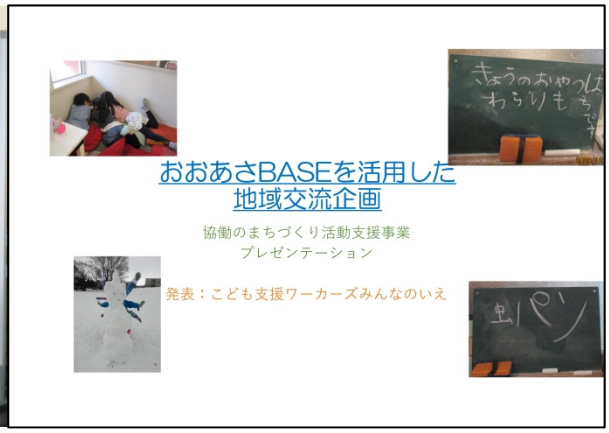
たい。学習会は、1 回きりではなく、初回とフォローアップの2 回実施を目標としている。

【選考委員Ｂ】
　支援対象が本当に必要な人に届いているか、来訪者の実態について教えてほしい。また、今後の拡大において、何が一番必要か。
【発表者】
　利用者は必ずしも困窮家庭の子どもに限らず、幅広い層に開放している。誰でも利用できる環境を維持することで、支援が必要な家庭も自然に参加できるよう配慮している。拡大にあたっては、地域の小学校や自治会などとの連携が不可欠であり、地域ぐるみの協力体制の構築が課題である。

【選考委員Ｃ】
　チラシの配布先について、どのように考えているか。また、野幌エリアに子ども食堂が少ない理由はあるか。
【発表者】
　チラシは、回覧板、高齢者クラブ、公共施設、学校を通じた配布、民生委員の協力を想定している。野幌エリアに関しては、以前の活動団体がコロナ禍の影響で撤退した経緯がある。現在は、新たな設置先の検討と協力団体の発掘が課題である。

【観覧者】
　商店街活性化など地域連携も進めており、とても良い取り組みなので、もっとその点についてＰＲしても良いのではないか。地域での繋がりが広がっているので、大変心強く思っている。
【発表者】
　今後は、商店街や地域との協働事例についても、発信を強化していきたい。

２．こども支援ワーカーズみんなのいえ



◆事業内容

江別にはフリースクールがなく、市教委設置のねくすとが一か所あるのみ。身近な地域に気軽に行ける場所が必要と思い、昨年「おおあさＢＡＳＥ」を開設。初年の活動を通して継続的な支援に加え、さらなる企画を実施する。

【団体の紹介】

大麻銀座商店街を拠点とする任意団体であり、地域の課題解決を目指す活動を行っている。

＜主な事業＞

放課後児童クラブ　みんなのいえ」の運営

- 中高生のための居場所「みんなの自習室」の提供
- 子どもの自由なあそび場「プレーパーク」の実施
- 地域住民が学び合う「子どもにやさしいまちづくり連続講座」
- 新しい取組（Ｒ６年～）「おおあさＢＡＳＥ」

不登校支援の居場所事業
過去最多となっている不登校児童・生徒への支援を目的とした取組

など
多岐にわたる

【課題・ニーズ】

文部科学省の調査によると、2023 年度の不登校児童・生徒数は34 万人を超え、10 年連続の増加となっている。

江別市内でも、教育委員会の報告により小中学生315 人の不登校が確認されている。市内の不登校支援施設は、教育支援センター「ねくすと」のみであり、フリースクールは存在しない。こうした現状から、子どもたちと保護者双方のために、気軽に利用できる居場所の必要性が高まっている。

【事業概要】
「おおあさBASE」は、大麻銀座商店街内「みんなのいえ」を活用し、週1 回（年間39 回予定）午前中に実施する不登校支援の居場所である。小学生以上を対象に、子どもは自由に過ごし、保護者同士もつながることができる場を提供する。予約不要、参加費無料とし、誰でも気軽に参加できる体制を整えている。
令和７年度は、活動の輪を広げるため、子どもも大人も楽しめる交流企画として、次の3 つの講座を開催する予定である。

・植物に触れあう「お花講座」
・自由な発想で取り組む「アート講座」
・食を通して交流する「調理体験（味噌づくりやお菓子作り等）」

同じ大麻銀座商店街にある花屋やアート教室と連携し、地域ぐるみの支援体制を構築

【期待する効果】
・居場所の存在を必要とする子どもや保護者に情報が届き、利用者が増加する。
・利用者同士のつながりが生まれ、地域内の支え合いが促進される。
・活動内容の周知を通じて、地域住民の理解が深まる。

【支出計画】
・委託料：近隣の花屋やアート教室講師への謝礼
・食料費：調理体験における食材費（味噌づくり等）
・備品費：オーブンレンジ
・印刷製本費：チラシ300 部を地域内に配布予定
・消耗品費：のぼり旗、ボードゲームなど
【最後に】
本事業を通じ、子どもたちのための安心できる居場所づくりを推進し、保護者同士の支え合いや、地域の人々が関わるあたたかい地域づくりを目指す。

◆ 質疑応答
【選考委員Ａ】
告知旗の購入は備品扱いではないか。また、味噌づくりの食材費が高額に見えるが詳細を教えてほしい。
【発表者】
告知旗については、すぐボロボロになり、何年ももつものではないので消耗品として申請している。
味噌づくりについては、調味料等が高額となるため、今回の食料費に計上している。

【選考委員Ｂ】
保護者の悩みへの支援や、精神的なケアをどのように行うか。
【発表者】
コンサルティングまでは至らないが、保護者が気軽に話せる環境づくりを心がけている。前年度も、子どもを連れてこられない保護者から相談を受けた事例がある。

【選考委員Ｃ】
チラシ配布の対象と配布方法について教えてほしい。また、スタッフ21 名という体制で、この多岐にわたる活動が持続可能なのか。
【発表者】
チラシは、小学校や回覧板、地域内の施設を中心に配布予定である。スタッフは全員が学童クラブで勤務しており、労働バランスを考慮しつつ、ボランティア活動として地域支援にも参加している。継続可能な体制を今後も維持していく考えである。

3. オレンジカフェ大きな木

◆事業内容

　認知症の方や一人で出かけるのは不安だが誰かと話したいと感じている人、介護で悩んでいる人が気軽に相談できる場所がないことが地域の課題だと思う。そのような方々が気軽に立ち寄り交流出来たり、相談できる場所があることをより知ってもらえるように周知の拡大とより楽しんでもらえるような居場所の充実を図る。

【団体の紹介】

　令和5年度4月より「オレンジカフェ大きな木」を開設。参加費は100 円で、誰でも事前申し込み不要で参加可能とし、気軽に立ち寄れる環境を整えている。

・目的

　認知症の方やその家族、介護で悩む方、一人でいることに不安を感じている方などが、気軽に相談できる居場所を提供すること

・活動内容

　市民交流施設ぷらっとを会場に、毎月第3月曜日の14時から16時まで開催しており、絵手紙、軽スポーツ（段ボール製モルック）などの活動を通じて交流を促進している。

【課題・ニーズ】

・認知症当事者や家族が情報や相談先を見つけにくい現状がある。
・1 人で外出しづらい方、介護で孤立しがちな方にとっての交流機会が不足している。
・早期に介護サービスにつなぐための気軽な相談窓口が地域に必要である。

【事業概要】

①広報活動の強化
・チラシ作成、公共施設や郵便局、野幌駅前郵便局への設置。
・まんまる新聞への広告掲載により、認知症の方やその家族、地域住民への周知を図る。

②活動内容の充実
・参加者が継続的に来たくなるよう、遊び道具（かるた、けん玉、塗り絵、脳トレグッズ等）を充実。
・ゲスト講師による体験型イベントを実施（例：フマネットの体験会、マジックショー、腹話術、介護や認知症についての講話など）。

③私たちだからできること
・介護施設勤務の経験を活かし、参加者への個別の相談対応や、必要に応じてケアマネジャーや地域包括支援センター等への橋渡しを行う。
・地域住民が気軽に立ち寄れる場をつくることで、引きこもりや密室介護を予防する。

【期待する効果】
・認知症当事者と家族の孤立防止や不安の軽減。
・適切な介護サービスへの早期アクセス促進。
・地域住民同士の交流や支え合いによる安心なまちづくりへの貢献。

【支出計画】
・謝金：外部講師への謝金（フマネット講師、マジック愛好会等）
・広報費：チラシ印刷代、郵便局でのラック型設置料、まんまる新聞広告掲載料
・消耗品費：遊び道具（かるた、けん玉、塗り絵、脳トレグッズ等）購入費

【最後に】
オレンジカフェ大きな木は、認知症ケアの相談拠点として、また地域住民の交流の場として、今後も持続可能な運営を目指す。参加者の声を取り入れ、地域の福祉資源として成長していきたい。

◆　質疑応答

【選考委員Ａ】
講師謝金について、市内のボランティア団体の活用は検討したか。また、郵便局のラック使用料が高額であるが、他の公共施設での周知は考えているか。
【発表者】
マジック愛好会シルクハットについてはボランティア団体から依頼し、謝金も低額で調整している。フマネット講師は地域に専門家が少ないため、札幌市内から招くこととなり、交通費も含めて謝金を計上した。
郵便局でのラック型設置は目立つ場所であり、初めての試みとして1 ヶ月分のみ計上した。今後も市役所や地域包括支援センター、公民館などへのチラシ設置は継続する予定である。

【選考委員Ｂ】
認知症の方はどの程度参加しているのか。
【発表者】
10名前後の参加者のうち、認知症が疑われる方は2～3 名程度である。認知症当事者に限らず、介護家族や一般の地域住民も含めた交流の場としている。

【選考委員Ｃ】
今後、認知症当事者や家族に限らず、幅広い対象に開かれた場にする予定か。また、参加者が増えた場合の対応や、今後の体制について教えてほしい。
【発表者】
今後も認知症当事者やその家族に限らず、広く地域住民に開かれた場とし、認知症についての理解を深める活動も続ける予定である。参加者が増えた場合は、支援してくれているロバの会のメンバーと協力し、対応する体制を強化する。

【来場者】
実際に参加している家族の立場から、認知症予備群の家族にとっても、話し相手ができる大切な場となっている。今後も継続して取り組んでほしい。
【発表者】
今後も利用者の声を大切にし、安心して過ごせる場づくりに努めていく。